Kitasato University
Pediatrics
Alumni Association

令和元年 12 月 20 日
発行責任者　小口　弘毅

北里大学小児科同窓会会報　Vol.24

令和元年度小児科同窓会総会にて

令和元年 6 月 22 日（土）

小田急ホテルセンチュリー相模大野

新教授就任挨拶

北里大学医学部小児科学の新しい理念：自己実現、組織の活性化、そしてこども達の健康と成長・発達への貢献

北里大学医学部小児科学

石倉健司

この度、北里大学医学部小児科学教授を拝命いたしました石倉健司です。長きに渡って自分を育て、応援してくださった諸先輩方、仲間達、そして後輩の皆様に心から感謝しています。そしてこの文章を執筆時点で就任からすでに半年経ちましたが、私を温かく迎え入れてくださった北里大学医学部小児科学の全ての関係の方々に改めて御礼申し上げます。

私は平成 5 年に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに慶應義塾大学小児科学教室に入局いたしました。その後大学病院、国立埼玉病院（当時の名称、以下同）、浦和市立病院、芳賀赤十字病院、清水市立病院で多くの先生方にお世話になり、平成 11 年には東京都立清瀬小児病院に着任し、その後同小児総合医療センター、国立成育医療研究センターと 20 年間にわたって小児病院で勤務して参りました。このように小児病院勤務が長く久しぶりの大学となりますので、北里大学では非常に新鮮な気持ちで日々を過ごしております。

私が着任早々に感じたのは、北里大学医学部小児科学の優れた可能性です。そしてその可能性を、小児科学の皆様が良くも悪くもあまり特別なことと捉えていないという現状も知りました。ですからこの素晴らしさを外に対して発信するのみならず、小児科学の皆様にも改めて認識していただくことも自分の重要な仕事であると思っています。

私が特に強調したいのは、恵まれた立地と、診療体制の素晴らしさです。立地としては首都圏の政令指定都市相模原市に位置し診療圏は広く、域内の小児人口も 20 万人以上となります。さらに診療体制としては、小児科は「周産母子成育医療センター」として整備され、大学病院内小児病院として機能しています。そして大学病院の小児科としては珍しく、PICU（8 床）と広大な NICU（23 床）を持ち、20 床の在宅病床もあわせ全体では約 100 床と非常に充実しています。周産母子成育医療センターの一員として、産科はもとより、泌尿器科、心臓血管外科、小児外科、脳外科等多くの診療科と一つのフロアで連携し、また様々な職種が深く協力しあって小児各領域の高度医療を行っています。末期腎不全の透析管理と腎移植、複雑心奇形の集学的治療、ECMO 管理、そして多くの小児外科的、脳外科的疾患の管理はその一例です。このようなポテンシャルの高さから、

ここ北里には少子化に負けない極めて充実した小児医療があり、今後も地域のこども達の健康と成長・発達に貢献し続けるものと確信しています。

私はこの小児科学を、「自己実現、組織の活性化、そしてこども達の健康と成長・発達への貢献」という新しい理念のもと運営していきたいと考えております。「自己実現」は哲学的あるいは心理学的な意味合いがある言葉ですが、私は少しシンプルに人が自分の能力や個性を最大限に発揮し、夢や目標を実現していく過程と捉えています。小児科医は極めて社会性が高い職業です。国の未来を担うこども達の健康に貢献し、彼らとその家族に幸せを届けるかけがえのないそして責任の重い職業でもあります。その小児科医を全うすることは容易ではなく、人生の全てを捧げる必要があるという考え方もあり得ます。しかし小児科医にとっても一度きりの人生であり、私の教室のメンバーにはぜひそれぞれが夢、目標を持ち、また個々の価値観にそって、そしてなにより自分の能力を最大限に活かしてその夢や目標を実現して欲しいと思っています。私自身も、常にそのように生きたいと考えてきました。その上で個々人の夢や目標が組織全体のミッションとシンクロし、組織も活性化する。そして最終的に、こども達の健康と成長・発達に貢献できることが自分達の基本的な姿勢です。もとより困難な道ですが、全力で取り組んでいきたいと考えています。

同窓会の皆様、是非この素晴らしい小児科学をより発展させるため力をお貸しください。

北里大学メディカルセンター　病院長就任のご挨拶

（同窓会総会にてのご挨拶要約）

北里大学メディカルセンター

病院長　坂東　由紀

2012 年 4 月に北里大学メディカルセンター（KMC）へ赴任してから、7 年が経過いたしました。 医師不足である埼玉県での小児医療体制、特に周産期・救急は相模原に比較して十分とは言えませんので、行政、医師会、3 次医療機関（埼玉医科大、県立小児医療センター）の先生と連携整備を行いました。また医学部の教育病院として研修医の招聘や学生教育に携わってまいりました。昨年から病院運営に携わることになり私にとっては大きな試練ですが、新執行部メンバーの協力を得て新たなスタートを切ることができました。KMC の現況についてご報告申し上げます。

―北里大学メディカルセンター　生い立ち―

平成元年(1989 年)、北里研究所が創立 75 周年を迎えた事業として 2015 年ノーベル賞を受賞された大村智先生の発案により埼玉県北本市に開設されました。現在は 372 床 27 標榜科、約 80 名の

医師と総勢約 800 名の医療スタッフが在籍しています。政策医療としては地域医療支援病院、災害拠点病院、臨床研修・臨床修練病院を掲げています。

―当院の特徴；地域に根差す実学の健康ステーション―

当院は北里柴三郎博士の「実学の人（医療人）であれ」という理念に基づき、「地域医療を追求し学べる病院」にするというビジョンを掲げています。昨今の社会環境の変化は目覚ましく、「患者さん中心の医療」と「協働の医療」を実践しなければなりません。「地域医療を学べる病院」とは、医療従事者が地域医療を学ぶ、地域にお住まいの方が病気や治療について学ぶ、また地域医療の整備に当たる行政の方々と学ぶ、などの意味が含まれています。埼玉県県央地区の二次医療圏は人口約 53 万人の地域です。今後の超高齢化社会を見据え、限られた財政や人員体制で地域に貢献できる行動目標を立てています。

―生命科学の総合大学、7 学部を持つ大学関連病院であるからこそ―

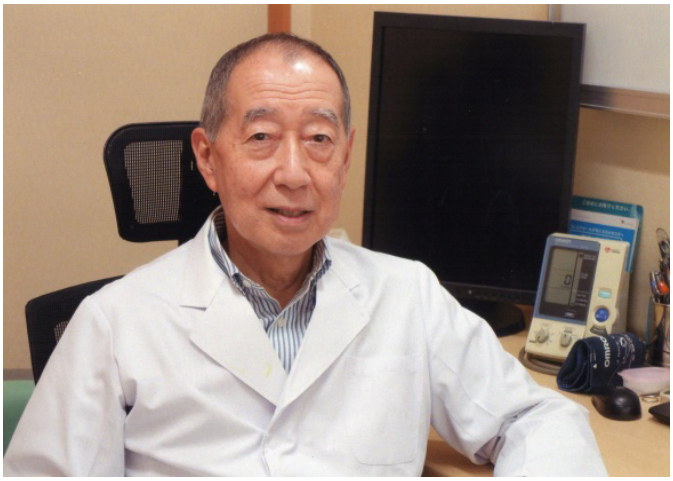
医師、看護師、薬剤師、放射線科技師、リハビリテーション技師、検査技師、管理栄養士など、ほぼすべての職種に卒前実習を提供しています。北里大学の特徴であるチーム医療教育を実習できる施設として相模原キャンパスと交流しています。昨年から院内コーディネーターの役割を持つ医師の育成を目指した「病院総合医育成プログラム」を開始しました。埼玉県の認定施設は当院で 6 カ所目、現在 2 名の医師が病院総合医を目指しています。また今年から地域の中・高校生を対象とした「Future Doctor スクール」を開催しています。外科医が中心となって手術手技体験、手術室やロボット手術・ダビンチの見学を行います。医療分野を目指す子供たちがこの地域からたくさん輩出されていくことを願っています。

―当院の特徴；大村智先生の夢であった「絵と緑のある病院」　そして犬がそばにいる―

大村先生は「芸術は自然と一体となり人間を健全に導く」というコンセプトとを重視され、自然観察公園に隣接した環境に融合するヒーリングアートを廊下に設営されました。「病気（病理・病態）を診断して治療する」という機能にとどまらず、患者さんと一緒に回復する力を見出し、追求して成長する、地域全体のレジリエンス（頑張る力）に役立ちたいと考えています。また当院には大事な病院長補佐がいます。動物介在療法を行う北里メディカルドッグ、現在二代目の「モカ」です。認知症や脳出血や脳腫瘍などの神経性疾患でリハビリ中の方を中心に訪問活動や作業療法のお手伝いを実施します。

このように当院の特色は大学病院であると当時に、地域に密着した市中病院でもありますので、プライマリ・ケアから標準化された専門領域について次世代を育成し、地域医療を実践し学んでもらう場を提供できればと思います。どうか今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

家庭医になってから



縣医院

縣　陽太郎

平成 7 年に両親が入院する事態となり、生まれ育った三ヶ日に戻りなんの準備も無く縣医院の 4 代目を継ぐことになりました。

三ヶ日の人口構成に合わせ少数の小児科患者と多くの高齢者が診療対象となり、特に種々雑多な訴えをする高齢者に戸惑い、相当な時間を割いて患者の訴えを聞いていたことが今振り返ると良い思い出に感じられます。

戻った当時の診療風景は、午前 8 時 30 分診療開始に合わせ従業員が直前に来て診療開始時間にシャッターを開け患者を迎い入れる状況でした。これが三ヶ日流と思いそのまま診療を続けていたところ、ある方から“若先生の仕事ぶりを見にきたが、これでは大先生の頃と全く変わり無いじゃないか。やる気を感じられない！”との苦言を頂きました。この言葉に発奮し縣医院の改築や診療時間の見直しを行うきっかけとなりました。診療は First Come First Service Base で行っていました。診療が軌道に乗ってきた頃、ある従業員が来た順番に診療するのは良いが、遠くからの人は年寄りを受診させるために予約に来院、家に戻り予約時間に年寄りを連れ来院し、診療が終わった頃また迎えに行く来院では負担が重く、受診希望の患者増に繋がらないので予約制を取り入れたらどうかとの意見がありました。その意見に従い再診時の予約制を取り入れた頃から、朝予約に行っても予約時間が昼や午後になってしまう事態が発生するようになりました。不思議な現象ですが、予約制を取り入れると、患者数を増やすことに繋がることを知りました。

その結果、診療時間が長引き、帰りが遅くなるようになって来ました。従業員からもっと早く帰りたい、診療受付時間を早めに終了したらどうかなどの意見が出てきます。診療時間短縮のため問診を看護師にとってもらったり、安定した患者は薬だけで受信回数を減らす努力をしましたが、今だに満足できず、何か妙案はないかと常に新しいアイデアを求めています。

振り返って考えてみると、高齢者など診たこともない若造に期待して、我慢強く来院してくれたことに感謝するばかりです。我慢の裏には三ヶ日の住民や高齢者が医者に期待する事を、早く私に理解して欲しい思いがあったからだと、最近になって気付きました。高齢者を含む患者の言葉に耳を傾ける姿勢が私に合ったこ

とも、期待に繋がったことは言うまでもありません。
　幕末に活躍した松平春嶽をご存知でしょうか。彼の残した言葉に“我に才略無く　我に奇無し常に衆言を聴きて　宜しきところに従ふ”があります。才能や良いアイデアの無い者でも、患者の話をよく聞いて、良いと思ったことを実行する。間も無く 67 歳になりますが、この言葉を座右の銘とし身体の許す限り当地で診療を続けていこうと考えています。

****

60 歳を、間近にして思うこと―診療所の役割や地域の人々との交流―

武井小児科医院

武井　研二

　武井小児科医院は、昭和 44 年(1969 年）父が開院したクリニックで、私は、7 年間、相模原療育園に勤務後、平成 21 年 4 月から、同院に就職（勤務）、父から継承。平成 25 年 4 月　院長に就任しています。当院では、一般的な小児科診療や健診、予防接種はもちろん、300 名以上の、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、学習障がい、協調運動障がいなどの発達特性をもったお子さん、心身障害児（者）に対しても、相談を、おこなわさせていただいています。地域支援も重視し、患者さんとご家族が安心感をもてる診療ができればと思い奮闘中です。近年になり、下記の将来の小児科医へのメッセージを、達成できるべき、日頃の活動を、マイペースで、すすめさせていただいております。
　北里大学病院小児科外来（非常勤医師　有給になりました）、ＳＴ学生の授業、児童相談所、陽光園、相模はやぶさ学園、青い鳥、生活介護事業　相模原市社会福祉事業団　松が丘園　嘱託医、自立支援法障害程度区分判定等審査会委員、保育園・老人デイサービス・相模原養護学校の産業医、相模原市医師会小児科医会・保育園部会　役員、その関連の委員会の委員、小学校の校医、保育園・こども園　園医、措置部会（児童相談所・こども家庭課：虐待関連）委員、児童デイサービス等の施設の協力医、相模原専門学校看護学生の臨床実習　等、各所で、勉強させていただいています。
　どの子も、親から受け継いだ素晴らしい素質を、持っています。われわれがすべきことは、その才能が花開くのを、あたたかく見守ることだと思います。こどものちからを信じること、保護者のちからをひきだすこと、ひとに、親切になれることを、医療に従事するにあたって、「心の糧」（「精神を豊かにするために役立つもの」、「心を慰めるのに役立つもの」）にできればと思います。
　また、兄は、静岡の掛川にて、こひつじ診療所（デンマーク牧場福祉会　特別養護施設、自立援助ホーム、養護老人ホーム、就労施設としての牧場も併設：全施設は後楽園の約 3 個分、診療所の窓からは、羊、牛もみえます。）にて、児童（成人もふくむ）精神科医として診療をおこなっていることもあり、当院も資金面にかんして、わずかでありますが、協賛させて、いただき、社会支援の大切さ・大変さも、痛感させていただいています。

今後は、老後の生活に向けて、妻とは、夫婦愛・人間愛から、人類愛？？をめざし、当院の後継者の模索、将来にむけての展望として、児童デイサービス・塾とのさらなる協調、重症心身障害児（者）、発達特性の方々等の在宅支援を、充実できるように、日々、精進できればと思います。

三浦寿男先生の好まれたおことばに、「小医は身体を医し，中医は人を医し，大医は国と社会を医す」があります。少し、背伸びして、私も、中医をめざせればとおもいます。

https://doctorsfile.jp/h/17788/　武井小児科医院 相模原市

将来の小児科医へのメッセージ　（ようこそ小児科へ　日本小児科学会　より）

１）いつでも、子どもたちの味方でいよう。

２）子どもたちそれぞれに個性があり、多様であることを尊重しよう。

３）子どもたちの現在、そして未来を育もう。

４）子どもたちを通して、家族や社会を応援しよう。

５）病院、診療所にとどまらず、外へも出て行こう。

６）社会における役割を考え、子どもたちに関わるすべての人たちと、協働しよう。

７）リサーチマインドをもって、小児科学、さらに、広く学問を追究していこう。

８）子どもたちに関われる喜びを、広く社会に、そして次の世代に伝えよう。

会員近況報告　**(年度初めの名簿記載事項確認の際に併せてお知らせいただいたものです。)**

原田正平先生：相模台病院小児科で小児内分泌外来を担当させていただいてから、まる２年がたちました。松浦信夫先生から引き継いだ外来ですが、　さほど受診者数を減らさずにすんでいるようです。これも近隣医療機関の　皆様からのご紹介のおかげと感謝いたしております。この場を借りて、　改めてお礼申し上げます。「令和」時代となりましても、引き続き　ご支援、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

仁志田博司先生：相変わらず、相模原や福島で新生児検診などをしております。
北里には、出来る限り月２回程度、周産期カンファレンスに参加しようと思っております。
残されたわずかな人生の間に、できる限り若い方々に北里の素晴らしい歴史を語り伝えたいと思っています。

門井伸暁先生：ご無沙汰いたしております。サッカーのゲームに出るくらい元気なのですが、この２年間で白内障や前立腺肥大の　手術を受けました。年齢相応の変化が生じているのでしょうが、あと３年くらい現在の仕事が継続できたらと考えております。皆様もお元気　で！

追悼　酒井　糾　先生

「敬愛する故酒井　糾　教授を偲んで」

東京女子医大名誉教授　北里大学客員教授
慈誠会病院名誉院長
難病のこども支援全国ネットワーク
レスパイト施設「あおぞら共和国」総支配人
ホームページ　http://h-nishida.com/

仁志田　博司

インターンが無くなった１９６８年に卒業した私は、５年間の米国での小児科研修を終え、出来たばかりの北里大学に１年目の小児科医として１９７４年に就職した時、やはりアメリカ帰りの酒井　糾先生はすでに助教授（現准教授）で、内科も含めた腎センター部長としてキラキラ輝いていました。

学園紛争の余波もあり母校とは縁が切れていた私は、米国の subspecialty board を取っていたので新生児のチーフとして採用されたと思っていたのが、日本のしきたりで freshman として働くことになり、卒業２年目の私より若い医師のネーベン当直をしていました。そんな、坂上教授からの誘いの言葉と余りに違う環境で鬱々していた時に、思いがけなく前任地のジョンズホプキンス大学から新生児の主任が突然退職したので assistant professor で戻らないかと誘いの連絡がありました。僥倖のような offer であり喜び勇んで再度渡航しようと考えましたが、すでに二人の子供と家内は福島の実家に腰を落ち着けていました。単身赴任の寂しさと、アメリカでの上に行けば行くほど厳しい競争の世界を考えて逡巡していた時に、親身にアドバイスしてくれたのが酒井　糾先生でした。

臨床一筋であったので研究の実績もなく、あるのは５年間死に物狂いで学んできた新生児を中心とした臨床経験とそれを学問的にバックアップする知識だけでした。酒井　糾先生は、「それは宝だよ、商業誌でも良いから総説として書きつづければ、花が咲くよ。」と助言してくれたのです。幸い、まだあの時代の医学・医療は日本と米国の大きな差があり、特に新生児は呼吸管理を中心とした neonatal intensive care unit が導入されつつある時代でした。私は毎月のようにどこかの雑誌にアメリカでの経験を書き続ける幸運に恵まれ、それが世に出るきっ掛けとなったようです。それは正に名伯楽のような酒井　糾先生のアドバイスによるものと感謝しています。

酒井　糾先生の所属は泌尿器科がしたが、そんなことには囚われず、小児科に世界に通用する市川・飯高・石館・河西らの pediatric nephrologist を育てながら、腎センターのチーフとして内科や腎外科の人たちと仕事をする学際的なセンスを持っていました。私の記憶では、すでに４０歳代前半で、単名の Pediatric Nephrology という教科書とも呼べる単行本を刊行しており、我が国の小児腎臓病学の第一人者となっていました。

盟友の小口医師が、単に山登り仲間の域を超えて、酒井　糾先生を尊敬しており、お身体が悪くなられてからも、先生を囲んでの食事会を何度も企画し、その折に私も参加させていただき、先生が語る日本の小児医療の行く末や北里大学のあれこれを聞かせていただきました。「やー、今が胸

つき八丁目だよ、なんとか頑張ろう、」の言葉をよく耳にしましたが、酒井先生が個人の非を責める話は記憶にありません。山で磨かれた心をお持ちであったと思っている。

９月３０日に、町田市立病院の ICU で短い時間でしたがお目にかかった時、小口くんの呼びかけに頷いておられました。もしかして、南アルプスの稜線で彼に声をかけられた時を思い出していたのではないでしょうか。

雪を掻き　尾根に向かって　登ゆく　稜線からの　雲海を見ん

仁志田くん　がんばろうねと　肩をたたき　笑みをこぼして　師（おさ）は去り行く

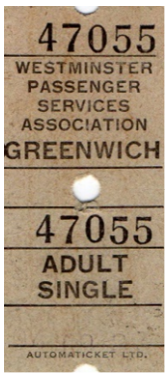
酒井先生、長い間お世話になりましたことを心から感謝しております。

****

「酒井糾先生を偲んで」

介護老人保健施設　青葉の丘

施設長　河西　紀昭



今年私は卒業後 50 年を経過した。従って酒井先生とのお付き合いもおよそ 50 年になる。私の卒業年度は昭和 44 年、北里への赴任は昭和 46 年 5 月、その年の 7 月から大学病院がオープンした。私と、私の同期の三原の 2 名が慶應から病院のオープンに合わせて入職した。そして三原は坂上教授のもとで新生児をやることになった。私は酒井助教授のもとで腎臓をやることになった。私自身は、慶應卒業後の 1 年間を精神科の牧田助教授（のち東海で教授となる）に師事し、児童精神医学に入門した（つもりだった）。しかし坂上教授は児童精神では論文は書けないと。そして当時慈恵の小児科でアメリカ帰りの酒井先生が、北里の泌尿器科の助教授で赴任され腎センター長を任されており、その下に私を組み入れたのである。その後は自由に腎センターに出入りしていた。当時腎センターのカンファレンスルームには、若く意気に燃えた医師達により早朝抄読会が自主的に開かれていた。そこから巣立ったのが、品川（現姓市川）である。

さて、その後、昭和 53 年に私は、英国ガイズ病院医学校（現ロンドン大学）のキャメロン教授のもとに留学した。その留学中に何回か酒井先生はイギリスに来られ、その都度ロンドンのわが家に泊まられた。ある日酒井先生の希望でテームズ川周遊の船に乗って、川をくだり、グリニッチ天文台に行った時のことだ。グリニッチの子午線の上に立って、今後の小児の腎疾患科をどうするか相談を受けた。我々の間ではこれをグリニッチの誓いと呼んでいた。日付の刻印はうすれてしまった

が、その時の帰りの、グリニッチからの汽車の切符を保存していた。またロンドン滞在のあと、イタリアのカプリで開かれた学会に、（私の家族も同行して）参加した時の写真をお見せする。カプリまでの船の甲板でのスナップ、お若い姿の酒井先生である。合掌。

****

「酒井先生の思い出」

飯高　喜久雄

私が酒井先生とお会いしてから40年がたちました。

1977年に留学を終え、日本へ帰国する途中にヘルシンキで行われた国際小児腎臓病学会に出席しました。その折に先生の下で小児透析や移植の勉強を続けるよう誘われ、1978年4月に北里大学病院に参りました。

当時小児病院での勤務を考えていましたが、北里大学病院に赴任した時の印象は、私がトレーニングを受けたシンシナティ小児病院と比較しても見劣りしない程のスタッフが揃っているということでした。症例も多く、特に小児腎臓病患者は北海道や九州からも紹介されて来院し、医師も全国から酒井先生の下に集まって来ており、活気が溢れていました。

酒井先生は温厚で優しい人柄で、誰にでも差別なく接して下さり、小児腎臓病のスタッフはもちろん他の科の先生方も皆酒井先生と一緒に働くことを楽しみにしていました。このような雰囲気の中で自由に臨床や研究をさせていただきましたことを大変感謝しております。

私にとって特に記憶に残ることは、酒井先生と一緒に国際小児腎臓病学会の仕事をすることができたことです。評議委員会や編集委員会などで、多い年には年に4回も海外に出張し、各国の先生方とお会いできました。イスラエルでの学会など今も楽しく思い出されます。

1994年に大和市立病院に移りましたが、それからも小児腎臓病の勉強や研究を続け、学校検尿に関する仕事や膜性増殖性腎炎の臨床病理の論文もまとめることができました。これも酒井先生や小児腎臓病の仲間の先生方のおかげです。

2012年に小児科を無事定年退職した時も、酒井先生に腎クリニック（透析クリニック）を紹介していただき、無事キャリアーチェンジをすることができました。現在も続けております。2年ほど前までは、時々私の職場のクリニックを訪ねて下さったり、中山にある先生のオフィスをお訪ねしたりして、食事をしながらいろいろお話を伺わせていただきました。いつも楽しい一時を過ごすことができました。

もうお会いできないのは残念です。楽しい思い出を沢山ありがとうございました。安らかにお休み下さい。

「酒井糾先生を偲んで」

石館　武夫

酒井先生、私、越野先生と昆先生

酒井糾先生は坂上正道先生と並んで私の生涯の恩師である。最初にお目にかかったのは昭和 47 年秋に北里大学病院の見学に行った時、1 学年上の品川（市川）家國先生に連れられ腎センターで御挨拶した時と記憶する。その後、晩年に至るまで公私にわたり何かと面倒を見て頂いた。私が現在の生活を送れるのも酒井先生が下地を築いて下さった御蔭であると心より感謝している。

酒井先生の最大の功績は人づくりであろう。本学内外を問わず、また諸外国からの留学生なども幅広く受け入れて育て上げて来た。当時若かった先生方が巣立った後でも面倒を見て、市川先生をはじめ各方面で立派に活躍しているのを何より喜んでいた姿が印象的であった。酒井先生の率いる北里大学の小児腎グループが泌尿器科と一緒に小児腎移植も手掛けたのは昭和 50 年過ぎであったろうか、当時それが可能な施設は都立清瀬小児病院、東京女子医科大学病院と北里大学病院の 3 箇所しかなく、全国から小児患者が次々と集まった。腎移植以外でも重症患者を快く引き受ける酒井先生の元で現場は大変であったが良い勉強になった。また学閥などを超越した繋がりで纏め上げた神奈川県内の学校検尿システムは他では追随できない精度と内容を誇っていた。都内では各大学が角突き合わせるので纏まらず、埼玉では中心になる大学も人物も見当たらない。酒井先生が作り上げた神奈川県学校検尿システムは神奈川県の外に出て見て初めてその素晴らしさを実感できるのである。小児腎臓の国際学会が日本で初めて開かれた際も酒井先生は事実上の主管を引き受け、会長には他の名門大学教授を立てて御自分は舞台裏に徹していた。このような人柄の先生だからこそ、多くの弟子達が慕い続けたのであろう。

恩師を最後に見舞ったのは２年程前横浜の病院であった。激務の人生を過ごされた酒井先生、ゆっくりとお休み下さい。誠に有難うございました。

****

「酒井糾先生との登山の思い出」

おぐちこどもクリニック

小口　弘毅　（１回生）

多くの先生が小児科医としての酒井糾先生の思い出を寄稿されているので、私は学生時代から酒井先生と一緒に登った山の思い出を書きます。酒井先生は慈恵医大の山岳部に所属していた山男です。山男同士と言う事で、酒井先生と学生時代から親しくさせて頂きました。最高の思い出は６年生の９月下旬に実習の最中、第一陣と第二陣に別れて５年生６年生合わせて２０数人で中央アルプスの登山をしたことです。天上の楽園のような伊奈川源流にテントを張って２泊３日を過ごしました。第一陣がロープウェー駅に着いた時、故障しており運行再開の見込みがたたないという事で話し合った末、一人（ほとんどが登山経験のない軟弱医学生）ほぼ 20kg の荷物を背負って歩きました。登山の中間地点でロープウェーは動き出し、下から見上げた我々の中で誰一人文句言う物は居なかった事は立派でした？何と１０時間かけて一人の落伍者も出さず目的地のテント場まで登ったのです。到着したのは夕闇が迫る頃になっていました。翌日酒井先生が率いる第二陣が来た頃はロープウェーは順調に動いており，酒井先生達は強行登山をする事無くテント場に集合できたのです。セピア色の写真はテントの中で酒井先生を囲んでくつろいでいる私達です。今の医学部で２割近い学生達が一斉に実習から消えたら大騒ぎになる事でしょう！首謀者の私は退学になったでしょうか？夜はたき火を囲み大宴会をしました。酒井先生は得意のシャンソン”ロンタンロンタンーー“と歌って下さいました。実習をさぼっての集団登山ですから、”俺が学生達と一緒に登山した事は内緒だよ“と私に口止めされました！

卒業後も小児科でご指導頂き、良く腎センターに遊びに行き、山の計画を立てたものです。５回生の丸野先生をマルちゃんマルちゃんと呼び、可愛がっていました。いつも酒井先生の周りには若い小児科医が群れており、先生に励まされ、そして一歩進むように背中を押してくれました。冬には何度も北八ヶ岳に大勢で登り、雪景色を楽しみました。また残雪の遠見尾根を登り、雪の中にビールを埋め、戻ってきてキンキンに冷えたビールで乾杯したのも懐かしい思い出です。早朝に仁志田先生を交えてグランドを走り、色んな事を話しました。走った後に良く北里の風呂に一緒に入りました。私が開業した後も折に触れお会いし、様々な助言を頂きました。開業して８年くらいした時に子育て広場を開設しようと相談すると、”おぐち、社会貢献も大切だから、思い切ってやりなさい“と後押しして下さいました。お亡くなりになったあと、私達（仁志

田、生化学の玉井、１回生の本多、衛藤、石後岡）は酒井先生の追悼登山をしました。歩きながら酒井先生の思い出を語り合いました。私たちは先生との楽しかった山行を忘れることは有りません。酒井先生のご逝去を悼み、心より先生のご冥福をお祈り致します。

追悼　西迫　真　先生

「５０年に満たない人生を駆け抜けて逝った西迫先生を悼んで」

おぐちこどもクリニック

小口　弘毅　（１回生）

西迫先生は聖マリアンナ医大で学んでいますが、卒業と同時に北里の小児科で研修していますから北里育ちの小児科医と私達は思っています。しかも４Ｃに勤めていた看護師ゆきさんと結婚したのですからなおさら生粋の北里育ちです。彼がNICUにローテートしてきた時、フレッシュマンなのに、大きな目をクリクリさせて、自信たっぷり自分の意見を述べる姿はとても印象的でした。生意気な奴とちょっと思いましたが、勉強熱心で、日々の診療でどんどん吸収しようと言う意気込みには圧倒され、きっと良い臨床医になるだろうと思いました。救急医療の要素の大きいNICUに興味を持ったようで、新生児科医になってくれると内心期待しました。しかしお父様が病を得て早くお亡くなりになったので、レジデントを終えると跡を継ぐような形で同じ場所で小児科開業医となり、北里を離れました。小児科医として一人前になるには５年は短かったかも知れませんが、彼は小児科医としての道を自分の力で切り開き、3人の元気なお子さんを授かり、なおかつ地域医療に貢献し若くして相模原市医師会の理事になり、大活躍しました。

開業に際して、彼もゆきさんも何故か風変わりな私のクリニックに来てしばらく私の診療スタイルを学んでくれました。そんな縁で、そして気が合ったのでしょうが、彼とは開業後も時々飲む機会もありました。北里で一緒に学んだご夫婦は、小児科医と看護師としてどんな理想の開業小児科を展開しようとしたのでしょうか？それは２人の想いが詰まったクリニックを見たら分かると思いますので、写真をご覧下さい。私もこんな素敵なクリニックを持ちたかったと羨

望の思いがわき上がってきました。

2018 年９月頃に彼の体調が悪いと聞き、お見舞いに行きました。久しぶりに会った彼はかなり痩せており、病状は逼迫していると分かりました。全て受け入れ、しかしなおかつ希望を失う事無く、若い時と同じように目をクリクリさせて語る彼の姿に圧倒され、奇跡が起こるようにと心から祈りました。1982 年に世界で始めて、オックスフォードに誕生したこどもホスピスである“ヘレンハウス”の理念として有名な言葉があります。それは“It is not how long the life is,but how deep”です。彼は５０年に満たない短い人生を深く深く生き、素敵な家庭を築き、私を含め多くの友人達を持ったのです。海をバックにＶサインを送っている彼の姿に私は感銘を受け、残り少なくなった小児科医人生を子ども達の為に使い切ろうと思いました。西迫先生は５０年に待たない人生を精一杯生き切ったのです。合掌

****

「西迫先生の思い出」

藤野こどもクリニック

藤野　宜之（6 回生）

西迫先生と初めて会ったのは相模原協同病院でした。
私が責任者のときに、大学からチーフレジデントを早めに経験した後の早めの出向で小児科に配属となりました。そのときは西迫先生のお父様の病状がかなり芳しくなく、早く跡継ぎとなるべく、近くて症例の豊富な病院での研修が目的となっていました。その目的に則り、積極的に診療や院内の懇親会に参加する姿を見て、若くして将来を見据えたしっかり者という印象を抱きました。当時は現在と異なり、企業による接待が常習化していました。その流れで西迫先生とお酒の話をよくするようになり、日本酒の好みが近いことがわかりました。それは、雑味のないすっきりとした味わいながら、お米の香りのする吟醸酒または大吟醸でした。色々飲み比べるために町田にあった“さんかつ”というお店に足繁く通った時期もありました。これをお読みの皆様にも、彼の好みのお酒を飲んで偲んで頂けたら幸いですので、代表銘柄を記載しておきます。それは静岡県島田市大村屋酒造の大吟醸“おんな泣かせ”、新潟県久須美酒造の大吟醸“亀の翁”です。後者は秋になると小数ですが成城石井で販売されます。珍しい日本酒を飲むために、新潟まで一泊で飲みに行ったのも懐かしい記憶です。銘柄は忘れましたが、佐渡で作られたあまり出回らないものを色々飲みました。しかし泊りがけで飲んだ時の記憶はあいまいで、銘柄をお伝え出来ないのが残念です。その後も日本酒だけでなく、ワインコレクターであったお父様のコレクションで、ワインを大勢で楽しむすばらしさも教えていただきました。西迫先生の御結婚のとき、協同病院小児科医局の内輪の発表会で彼の生まれ年のシャトー・ラフィットが提供されました。普段はお酒の飲めない T.渡辺先生が“これなら私でも飲めるかも！”と言った後、みんなに止められていたのを思い出します。

このような人付き合いの良さと医療への熱心さは自宅での開業後も継続し、津久井医師会の中心を担い、相模原市との合併後は医師会理事として救急医療や公衆衛生部門の責任者として活躍されました。救急や公衆衛生部門はお金にかかわる基本計画の策定によく出くわします。そんな時に西迫先生は理想を掲げつつ、北里大学とその関連病院がないがしろにされないように、うまく舵取りをしてくれていました。相模原の市民、医師会、北里大学の三者が１両得となるように、ネゴシエーションの会が何度か開かれましたが、西迫先生は５大シャトーのワインで場を和らげてくれていました。現在市内の保育園で使われている、発達障害を見つけやすくした健診マニュアルも彼の努力の賜物と思います。

西迫先生は聖マリアンナ大学の卒業生ですが、北里大学の小児科に大変感謝しているとよく言っていました。いわゆる外様の入局者に対して、家庭の事情とはいえレジデントのカリキュラムを自分のために崩し、チーフを前倒して希望者の多い出向病院に派遣した事。それによって多くの経験や人脈を作る機会を与えてくれたことに対する恩や、迷惑をかけたことに対する義理は忘れないと。そのせいか、病気でからだの体積が半分くらいになってしまっても、自院で健診を続け、医師会の会議でも最後まで理事として将来を見据えた発言している心意気は、目を見張るものがありました。そんなことを思い出していると、最近かけ始めた老眼鏡が曇ってきてしまいましたので、そろそろキーボードから離れます。飲むことばかりの思い出話にお付き合いいただき、ありがとうございました。これから今夜は西迫先生を思ってお酒を飲むことにいたします。私も見習って地域医療の仕事にもう少しがんばろうと思いますのでお許しを！

****

「西迫　真　先生を偲んで」

北里大学医学部　小児科学

岩﨑　俊之（17回生）

「迫（サコ）ちゃん、どうよ最近？」と曖昧に尋ねると、「え、何がですか？」と人懐っこい笑顔の西迫先生が聞き返してくれたことを思い出します。20 年以上前の二人の当直中の会話です。二人とも車好きで、当時流行した open two-seater car に乗っていました。入局年度は私の方が 2 年先であったと記憶していますが、ほぼ同世代ですから、話は尽きませんでした。

とても優秀な小児科医であり、“仕事が早い”人でした。病棟業務においても、やるべき仕事を素早く見分けて優先してやり遂げるスタイルでした。彼は、「無駄な努力はしない。」と常々言っていました。自分の出来ることを全うすることで、最大の効果を得ることを目標にしていたように思います。さらりと言ってのける彼に、不器用な私はびっくりしたことを覚えています。

彼が開業されてからは、医師会の会議でお会いする程度になりましたが、話し掛けると、あの人懐っこい笑顔は健在でした。彼が病を患ったことは、周囲から聞いていました。自分の多忙や彼の病状に配慮することを言い訳にして、お会いできなかったことが今でも残念でなりません。彼が地域医療に貢献した結果、たくさんの子供たちが元気になったことは言うまでもありません。その子たちがそれぞれの人生の節目において、笑顔の西迫先生を思い出してくれることが、彼が頑張った証しになることでしょう。

いま、「迫ちゃん、そっちはどうよ？」と尋ねたら、なんて答えてくれるのでしょうか。西迫先生のご冥福をお祈り致します。

Dr.Edogardo Ortiz より

My Memories of Kitasato: Kitasato University Hospital- a ground breaking training institution for Filipino MDs

My memories of Kitasato will never be cast in stone but they will always remain indelible in my mind for as long as I live.

It all started in the autumn of 1978 when I first sat foot at the impressive and modern building of Kitasato University Hospital in Sagamihara. I have been told that the hospital then was the most modern hospital in Kanto（関東）, famous for its obstetrical department, and matched by its partner NICU headed by Dr Hiroshi Nishida.

I was then a first year resident in Pediatrics at the University of the Philippines-Phil. General Hospital. I was given the opportunity to present a paper on Rheumatic Fever in the Young at the Asia Pacific Congress of Cardiology held in Osaka with a satellite meeting- The International Congress of RF/RHD which was held in Otsu City. That was my first trip outside of the Philippines, and my very first research work. During that trip, I accompanied Prof Luis Mabilangan, noted pediatric cardiologist and our department chairman and my mentor, who was invited as Visiting Professor of Kitasato University by his friend Professor Masamichi Sakanoue, then Chairman of the Department of Pediatrics, KUH, and secretary general of the Japan Pediatric Association.

My first impression of a beautifully modern building turned to awe and admiration when we toured the facilities, the child and parent friendly pediatric wards including the nurses station with its automated chutes to send and receive lab results, the computerized record system which was very new at that time, the very modern NICU caring for 400 gm babies, the nephrology center, transport system involving referrals from Yokota airbase,,etc and the invitation to attend the regular faculty meeting attended by the “gods” – Prof Sakanoue, Prof Yashiro, Drs Tadasu Sakai, Hiroshi Nishida, Nakajima, Endo, Iitaka, Oyama, and others whom I can no longer recall – all fully credentialled faculty members who graduated from Keio U, (rivalry, included). It also gave us an opportunity to see 4-5 typical Kawasaki Disease patients all at the same time! I was really very impressed!

This initial 3-day visit was followed by 2 3-month rotations in the section of pediatric cardiology now as a 3rd year resident and then as a junior consultant These 6 months rotation gave me tremendous opportunity to learn deeply about the subspecialty- fetal circulation, ductus arteriousus, various congenital heart diseases and was

exposed to more KD with coronary aneurysms, their natural history and various treatment modalities. These experiences would not have been possible without the guidance and support then by a struggling senior resident, Dr Kouki Oguchi, who eventually became my mentor and best friend! This rotation also enabled me to visit the National Cardiovascular Center in Osaka through the help of Prof. Yashiro and Dr Kamiya, and the friends of Dr Oguchi. These very fruitful rotations sealed my future! I will be a pediatric cardiologist!

The rotation enabled me not only to acquire knowledge about the subspecialty but also to participate and collaborate in 3 research activities by Dr Oguchi on the value of contrast echocardiography to determine PDA, the natural history of the ductus arteriosus by monitoring the left pulmonary artery sizes by echocardiography, and one on fetal circulation which were all eventually published.

I will never forget the fatherly guidance and generous support provided by Prof Sakanoue; the strong guidance and teaching sessions with Prof Yashiro initially and then with Dr Hiraishi; the intellectual discussions on medicine, politics, history, and other topics with Dr Tadasu Sakai, Dr Nishida and Dr Oguchi over beer and during the daily early morning joggings around the athletic oval; and the very stimulating rounds conducted by Dr Nishida at the NICU and discussions on neonatology topics, including ethics in the care of very small preterms. Of course the experience was not all serious stuff! I had an opportunity to watch actual sumo wrestling matches with the grand Yokozunas （大相撲）with Prof Sakanoue and Dr Oguchi; several wonderful mountaineering activities organized by Dr Oguchi and some 3C nurses to admire autumn in the slopes of Mt Yatsungatake（八ヶ岳連峰） and other country sides; and numerous parties and kampais! Not to be forgotten was my memorable stay at the hospital dormitory- spartan but very comfortable, ably managed by the ever smiling Mr Kamei. Last but not the least, are the numerous friends I have developed over the years(Dr Misawa, Agata, Suzuki, Horiguchi, Abe, etc) including with the one and only Dr Kouki Oguchi, a friendship that has withstood the test of time -41 years and counting!

I am most grateful for the opportunity to have experienced KITASATO U Hospital in its totally and once again thank most sincerely Prof Sakanoue, Prof Yashiro, Dr Nishida, Dr Sakai, Dr Hiraishi and Dr Oguchi! More power and my very best wishes to the administration, the faculty, the staff and the alumni association! My rotation was followed by 4 other pediatricians who eventually became very succesful in the fields of Nephrology(2), Hematology oncology(1) and Allergology(1); and 1 pediatric surgeon.

Postscript

After this experience, Dr Edgardo Ortiz, did a further 3-year fellowship in Pediatric Cardiology at the Hospital for Sick Children at the Great Ormond St, in London and at the National Heart Hospital, also in London, UK. When he came back to the Philippines, he worked as a faculty of the University of the Philippines College of Medicine where he rose from the ranks to become Professor of Pediatrics and Pediatric Cardiology, and chairman of the Department of Pediatrics for 6 years; and served as President of the Phil Heart Association and the Phil Society of Pediatric Cardiology. He retired in 2009 and was asked to join GlaxoSmithKline as Medical Director for Vaccines in Indonesia and currently, in Vietnam.

エガイとの８日間の旅

おぐちこどもクリニック

小口　弘毅（1 回生）

40 年以上も前に北里の小児科に短期留学しただけの彼との友情がなぜこれほど長く続くのか我ながら不思議ですが、唯良い奴で馬が合うとしか言いようがありません。会うとたちまち魔法にかかったように昔のエガイとコウキに戻って戯れてしまうのです。台風による悪天候が続いた後の、10 月 31 日から快晴に恵まれて日本橋のホテルを根城に東京中を歩き回り、途中相模大野、山中湖、箱根にも行きました。駅ビルにあるつつじの茶屋では仁志田、平石、縣先生も交えての歓迎会となりました。彼は記憶力に優れ、昔のスタッフをよく覚えており、いまだに日本語の片言がいっぱい出てきます。“なんていうのかな”、“おかしいな”、など会話の中にポンポン飛び出してくるのです。奥さんはフィリピン大学小児科の神経専門医、そして同行した娘さんはフィリピン大学医学部を卒業したばかりインターンを前にした来日でした。日本で言えば全員が東大卒？というエリート一家なのですが、そんな感じは全くしません（私が鈍感？）。最後は一緒にディズニーシーに行き、ミニチュア世界旅行を楽しみました。今度は京都奈良にと約して別れました。北里大学小児科が昔のように外国からの若い小児科医の留学受け入れを再開したら良いなーと思いました。

関連病院から

社会福祉法人慈恵療育会　相模原療育園

施設長　細田のぞみ

相模原療育園は、北里大学病院から車で 10 分程度の距離にあります。故三浦寿男先生が北里大学病院を定年退職された後、相模原療育園に移られた平成１５年に私も一緒に相模原療育園にまいりました。その１年前に先発隊として武井研二先生が赴任され、それまであまり積極的な医療を行っていなかった施設の医療レベルを引き上げる準備をしてくださいました。

平成１５年４月から北里大学病院小児科神経グループトリオが本格的に相模原療育園の医療改革をおこないました。われわれが赴任する前は、在宅生活が困難になった重症心身障害者の生活を支える入所施設の機能のみでしたが、平成１５年からは外来診療を開始し、当時北里大学病院小児科のてんかん外来に通院していた、障害のある成人患者さん約１５０名を、引き続き当施設の外来で拝見することにいたしました。

平成２１年３月に武井先生が、平成２３年３月に三浦先生がお辞めになり、トリオが自然消滅する結果となって、最後に残った私が平成２４年度から施設長になり現在にいたります。現在は、聖マリアンナ医科大学小児科出身の小川泰子先生、神経内科、小児外科の先生方と病棟管理をしております。５８名の長期入所者も高齢化・重症化しており、中心静脈栄養、気管切開、胃瘻、膀胱瘻などを必要とする人が増え、悪性腫瘍なども見つかるようになりました。小児科の医師だけでは管理することが難しく、内科や外科の先生方のお力を借りて診療をしております。また北里大学病院小児科に通う在宅人工呼吸器療法をしている方の短期入所受け入れも行っています。

外来は従来のてんかん外来から発達外来に大きく方向転換し非常勤の根本文子先生、開田美保先生と３人で発達障害の診療を行っています。また、かねてからさまざまな障害のある子ども・大人のリハビリを充実させたいという思いがありリハ部門の拡充をはかってまいりました。現在リハ部門は常勤 PT３名非常勤の OT２名、ST１名、臨床心理師１名という大所帯になっております。北里大学病院小児科神経外来に通院する多くのお子さん、また当法人が平成２６年度に開設した児童発達支援センターバンビに通う発達障害のお子さんたちが多数リハビリに通ってきてくれており、嬉しい限りです。

なお平成１７年度から毎年、北里大学病院研修医２年目の地域医療研修の協力機関として研修医を受け入れており、また平成２９年度より聖マリアンナ医科大学医学部の学生の早期体験実習も受け入れております。また在宅の重症心身障害児・者等への質の高い訪問看護を提供できることを目的とし、平成２３年度より相模原市から当法人が委託を受け、「相模原市重症心身障害児者・医療的ケア児等看護研修事業」をおこなっております。この事業はさまざまな方面からご協力をいただき、知識を身に着けるための講義、北里大学病院や相模原中央支援学校の見学、ご家庭や生活介護施設での現場実習などの多彩なプログラムを受講者に提供しており、毎年、看護師だけでなく、重症心身障害児者にかかわる方たちが参加され、好評を博しております。

微力ではありますが、今後も、さまざまな障害のある方とご家族に選ばれ続ける施設、そして地域に開かれた施設をめざし、努力してまいります。どうぞよろしくお願いします。

ホームページもどうぞご覧ください http://www.jikeiryouikukai.or.jp/

相模原療育園（南区若松）

児童発達支援センターバンビ
（南区新磯野）

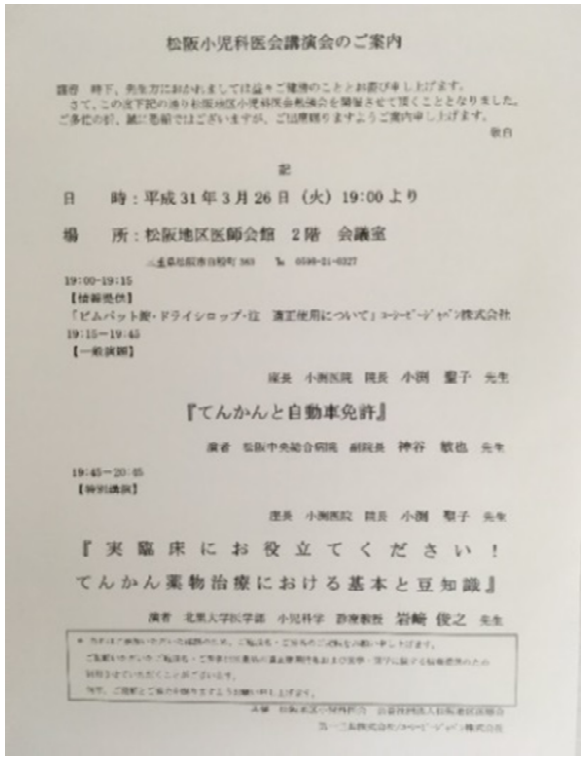
古株の独り言　～諸先輩方はやっぱり優しい～

岩﨑　俊之（１７回生）

北里大学小児科に入局して、はや26年が過ぎました。大学内で勤務する北里大出身の小児科医の中で、私が遺伝診療部の高田教授に次ぐ古株になってしまったことに驚くばかりです。一方では、各地の大学や医師会の先生方から、講演のためにお招き頂くことも増えて参りました。先日、とても嬉しい出会いがありましたのでご報告致します。

2019 年 3 月 26 日に、三重県松阪市の公益社団法人松阪地区医師会より講演のご依頼を頂きました（図 1）。あの素晴らしい牛肉で有名な場所ということもあり、二つ返事でお受けしました。

私の研究テーマは、故三浦壽男先生にご指導頂いた“実臨床に役立つ薬物血中モニタリング”ですので、新たな抗てんかん薬であるラコサミド（Vimpat®；第一三共・UCB）を中心にお話しさせて頂きました。参加して下さった先生方は大変熱心で、睡魔の誘いに負けず、私の拙い説明に最後まで耳を傾けて下さいました。多くのご質問も頂戴しました。大変充実した時間を過ごすことが出来ました。



松阪小児科医会講演会のご案内

謹啓　時下、先生方におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
さて、この度下記の通り松阪地区小児科医会例会を開催させて頂くこととなりました。
ご多忙の折、誠に恐縮ではございますが、ご出席賜りますようご案内申し上げます。
敬白

記

日　　時：平成 31 年 3 月 26 日（火）19:00 より

場　　所：松阪地区医師会館　2 階　会議室

19:00-19:15
【協賛講演】
「ビムパット錠・ドライシロップ・注　適正使用について」コーシービージャパン株式会社
19:15－19:45
【一般講演】

座長　小渕医院　院長　小渕　聖子　先生

『てんかんと自動車免許』

演者　松阪中央総合病院　副院長　神谷　敏也　先生

19:45－20:05
【特別講演】

座長　小渕医院　院長　小渕　聖子　先生

『実臨床にお役立てください！
てんかん薬物治療における基本と豆知識』

演者　北里大学医学部　小児科学　診療教授　岩崎　俊之　先生

図 1

講演が終わりほっと席に着いたときに、後ろから優しいお声がかかりました。誘われるままに、地元で有名な焼き肉の名店“一升びん”にご一緒させて頂きました。素晴らしくおいしい松阪牛をごちそうして頂きました。ほとんど飲めない私が、嬉しくて飲み過ぎてしまった恥ずかしい写真が図 2 です。連れて行って下さった先生をご存知の方が、たくさんいらっしゃると思います。2 回生の笹尾幸雄先生です。先生からは、私の存じ上げない北里大学小児科草創期の様々なお話をお聞きしました。初代主任教授の坂上先生の緊張感みなぎる病棟回診の時の様子や、当時活躍されていた

図 2

先生方の武勇伝などの知られざる逸話ばかりでした。誌面でご紹介できないのが残念です。さらに先生からは、近年薄れている先輩後輩の繋がりの大切さを、とくに教えて頂きました。楽しくて幸せな時間をご一緒できて、素晴らしい思い出になりました。

はるかに上級の先輩で、私を直接ご存じない笹尾先生が、同窓の後輩だからと歓待して下さったことが、とても嬉しくて報告させて頂きました。笹尾先生、本当に有難うございました。先生に教えて頂きましたように“縦の繋がり”を大事にしながら、後輩の先生達を指導して参ります。

臨床報告

現在の大学病院での治療・管理　～昔とくらべてどう変わったか～

小児集中治療　安藤　寿（27 回生）

２　小児集中治療編～　小児集中治療について

昨年の「神経グループ編：けいれん重積の管理」に引き続き、第 2 回目は小児集中治療室から「小児集中治療について」解説させていただきたいと思います。

１）　北里大学病院・小児集中治療室(Pediatric Intensive Care Unit; PICU)の歴史
２）　全国の小児集中治療室との比較
３）　まとめ

１）北里 PICU の歴史

2002 年 1 月に北里大学病院 3C（乳児・幼児）病棟の片隅に 8 床の PICU として産声を上げました。当時の PICU において、特に力を注いでいたのは「呼吸不全」「先天性心疾患」の患者さんだったと記憶しています。まだ北里大学病院・小児病棟における PICU 運用は未整理であり、新生児集中治療室(Neonatal Intensive Care Unit; NICU)や 3A（学童）病棟のハイケアユニット(High Care Unit; HCU)との重篤小児の棲み分けは複雑でした。例えば、新生児の先天性心疾患症例の術後管理や急性期を過ぎた月・年におよぶ症例の移行病床の問題などです。当時の管理体制は Open ICU 方式と言われる入室させた各科が管理を行う方式をとっていました。このため集学的医療は難しく効果的な ICU 管理を行うことができませんでした。結果として患者さんの停滞し効率的運用は困難なため、当時の年間入室者数は 250 名程度に留まっていました。

2012 年頃より徐々に PICU－NICU－一般病床間での患者棲み分けや患者管理体制の変更を始めました。新生児症例であっても先天性心疾患の術後や先天性横隔膜ヘルニア周術期などの侵襲性

の高い症例は、PICU で管理するようになりました。人工呼吸管理を要する症例であっても、気管切開などの処置後の状態安定に伴い一般病床に移床するなど積極的な病床の効率運用を目指しました。

最大の変化は 2014 年の新病院開設に伴い PICU 内に小児科所属の専従医を配置し入室患者の**協診・協働体制**を徹底しました。診療体制の変更に伴い、内科疾患・外科疾患・外傷などの症例特性や科の違いによって起こる管理体制の差異を減少させることができました。具体的には①小児医療に習熟した医療スタッフのケアを全患者が受けられる。②全ての症例に専従医のチェックが入るためプラクティスの煩雑さや混乱を減少することができる。③入室依頼科のスタッフは専従医にケアを委ねて他の診療に従事できる。④PICU をローテーションする若い小児科医は内科管理に限らず、“術後・外傷管理”や“気管挿管・中心静脈路確保などの手技”を数多く経験できるなどの恩恵を得ることができました。診療体制の変化は診療部のみならず看護部にも起きました。それまで 3C 乳幼児病棟と合同であった PICU は、新病院開設に伴い独立単位での看護体制となりました。

こうした“より急性期に特化した診療”を展開することで重篤小児の集約や効率的な管理が可能となり、病床運用効率が上昇しました。具体的に年間入室者数は 500 名前後に増加し、PICU 平均在室日数は 5 日程度となりました。

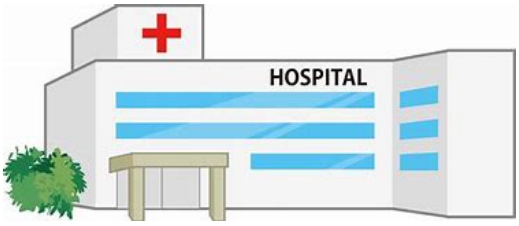
２）　全国の小児集中治療室との比較

	北里 PICU	全国平均
病床数	8	9.5
年間入室症例数	460	408
人工呼吸管理	256	217
急性血液浄化	14	12
ECMO	5	5
心臓外科手術	72	109
PICU 死亡率	1.73%	1.7%
在室日数	5.2 日	7.5 日
PICU 専従医数	4	7

北里大学病院 PICU・全国平均ともに 2018 年のデータによる。
全国平均は PICU データベース（全国 32 PICU 総症例数 13,069 名）を参照。

３）まとめ

まずは北里 PICU の 18 年の歴史を振り返りました。続いて現在の全国 PICU と治療成績を比較してみました。現在に至っては全国平均並みのボリューム・治療成績であるようです。今後、未来に向けては現在の水準を維持しつつ、こうした成績・知見を発信していける新しい 10 年になればと考えています。



2019年度医局長報告

医局長　橘田一輝（28回生）

2019年度8月より野々田前医局長より業務を引き継ぎました。本来ならば4月からの予定でしたが、主任教授として石倉先生が赴任され医局の体制が変わる中、御配慮のもと、野々田先生に医局長として数か月の延長を頂きました。野々田先生、本当にありがとうございました。さて、引き継いでみますと医局長としての仕事は多岐にわたっており、なってみないとわからない多くの仕事がありました。臨床、教育、研究が仕事であるとは諸先輩方の教えではございますが、いままでそれらの仕事に専念できていたのは歴代の医局長を担当されてきた先生方の人知れない努力のおかげなのだと実感しております。

＜医局員構成＞

大学の院内スタッフは石倉健司主任教授、中西秀彦教授、岩崎俊之診療教授をはじめ、臨床准教授1名、講師3名、診療講師3名、助教9名、後期研修医（病棟医）7名の体制となっております。院外人事につきましては関連病院5病院に19名が配置されております。大学内外にかかわらず、厳しい医局事情の中で皆様に診療頂いており、御協力に感謝申し上げます。

留学は、New York Medical Collegeに北川篤史先生が海外留学中であり、国立精神・神経医療研究センター小児神経科に土岐平先生が国内留学中です。留学には留学の大変さがあると思いますが、留学後の御活躍を期待するとともに、留学先では是非頑張って頂きたいと思います。

＜新入職、および退職＞

本年度の入局者は、腎臓グループに奥田雄介先生が赴任され、伊藤尚志先生が感染症グループとして復帰され、また循環器グループに平田陽一郎先生が赴任されました。医局に新たな風を吹き込むとともに、思う存分に御活躍頂きたいと思います。一方で菅本健司先生と桑田聖子先生が3月に、齋木宏文先生が7月に退職されました。様々な相談をさせて頂き、また御指導も頂き、北里大学小児科医局のために御尽力賜り誠にありがとうございました。新天地での御活躍を御祈念申し上げます。

＜病棟・外来診療体制＞　敬称略

周産母子成育医療センター

センター長：海野信也（産婦人科）

総病棟主任：本田崇

診療主任：NICU 釼持学、PICU 安藤寿、6E 本田崇

外来主任：野々田豊

東病院

小児在宅支援センター

センター長：岩崎俊之

＜小児科専門プログラム専攻医制度＞

小児科専門医研修は新制度であるプログラム制に変更されました。また専門医制度においては、第三者機関である日本専門医機構による認定となりました。それに伴い専門研修の総括的評価として、小児科医としての必須の知識および問題解決能力に対しては簡易診察能力評価(Mini-Clinical Evaluation Exercise:mini-CEX（診察場面を観察し、具体的、客観的に評価する評価法））、マイルストーン評価(医師としての能力を到達段階レベルごとに具体的に記載したものに沿った評価)、研修手帳を使用し小児科専門医としての適切なコミュニケーション能力と態度の評価に対しては多職種による360度評価(臨床現場で専攻医とともに診療を携わっている複数かつ多職種の評価者による評価）を行い研修修了の評価を行うことが求められてきています。

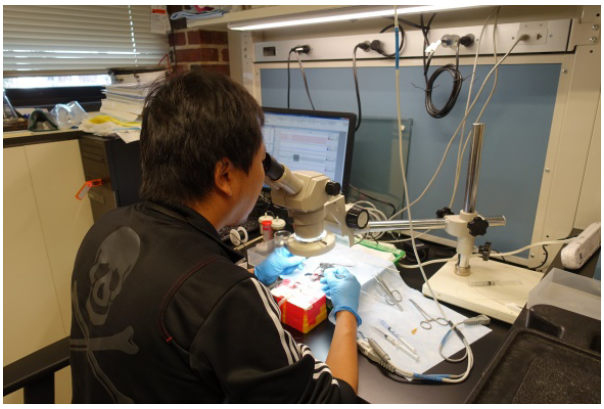
＜医局長より＞

小児科主任教授として石倉先生が赴任されました。今、医局では新体制の整備の真っただ中です。時代は移ろいやすく、より早い変化を社会は求めており、変化をしないものは淘汰されます。インターネットが普及し世界の距離が縮まり、人工知能の出現で「ヒト」に求められる能力も変わってきております。そして医局員それぞれの働き方への改革がせまられています。そういった変化の求められる環境の中で、医局としてどのように環境適応ができるのか、模索を続ける日々とも言えます。もちろんまだまだ我々は脆弱であり、たくさんの助けを必要としております。今後の発展のためには同窓会に御協力頂くことも欠かせないと考えております。中にいるとわからないことが多くあります。同窓会の先生方におかれましては、今後とも、厳しい指導を賜りたいと存じます。

留学報告

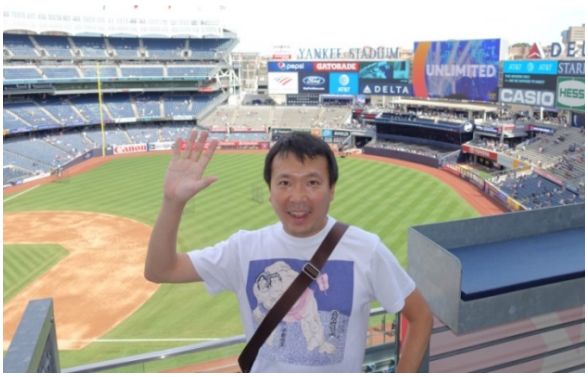
留学して「New York Medical College」

北川　篤史



早いもので New York に来てから間もなく 1 年半が経とうとしています。こちらの生活にはだいぶ慣れ、友人と Manhattan で吐くまで飲んで、終電に間に合ったのに 2 駅乗り過ごして、家まで 2 時間かけて歩いて帰ったくらい近所の道にも詳しくなりました。今のところテロや銃撃事件、大きな自然災害にも遭わず、最近妻からハゲ呼ばわりされている頭頂部以外の身体は元気に毎日を過ごしています。1 年前までは、NY には有名人もたくさん住んでいるので、Taylor Swift や田中マー君に会えないかなあと思っていましたが、ピースの綾部やキングコングの西野、松居一代すら見かけたことがありません。妻の友人は

Costco で小室圭さんを見かけたそうですが、定かではありません。現在の最大の悩みは物価が高いことで、日本では 100 円ショップの DAISO が NY では 1。99 ドルショップでやっていたり、一風堂のラーメンが 1 杯 18 ドルもするくらい暴利です(まるでキャバクラで注文するキュウリの浅漬けくらい暴利です)。そのため貯金はみるみる減っていき、闇営業かタピオカミルクティー販売でも始めようかとも思いましたが、若干給料も頂いているのでまだタピらずに済んでいます。

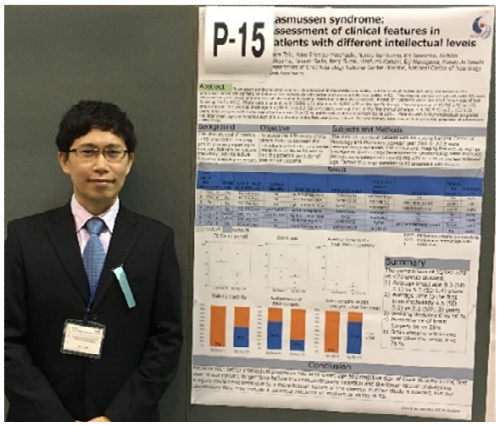


留学先の New York Medical College は、NYC の北側に位置する Westchester 群というとってもお金持ちの住む地域にあり、1 年目の途中で気付いたのですが、とっても Jewish な大学です。男子の学生さんは小さい帽子(kippa)を被っている人が大勢おり、私も頭頂部を隠すために kippa を被って日本に帰るかもしれません。大学も Rosh Hashanah とか Yom Kippur とか良く分からない Holiday があったり、逆に Colombus day が休みじゃなかったりします。最近では大学内に Starbucks ができました(抹茶フラペチーノはありません)。所属する Department of Pharmacology の Lab で PI はインド人の Dr.Gupte ですが、日本に留学経験もあるらしく、「オハヨウゴザイマス」とか「ワカッタ?」とか「アベ(首相)ハ、ゲンキカナァ」など、色々な日本語で話しかけてきます。Dr.Gupte の Lab は、PhD が卒業したり来なくなったり、ポスドクが他へ異動したりして、現在は私の他は Part time worker が 1 人いるだけの小さな Lab です。先日は、Dr. Gupte 自身が原因不明の UTI(怪しい)で 1 週間ほど休んでいました。研究内容は主にグルコース 6 リン酸脱水素酵素(G6PD)の血管平滑筋細胞の形質転換に関わる研究で、肥満症モデルラットや肺高血圧症モデルマウスの心血管機能と G6PD の関係を調べています。とはいえ、生化学的な仕事は Part time worker の人がしてくれるので、もっぱら動物の心エコーや心臓カテーテル検査ばかりしています。日本でも心エコーや心臓カテーテル検査はたくさんしてきましたが、体重 20g 前後のマウスの心臓カテーテルはとても難しく、何度も YouTube を観て勉強しました。YouTube は何でも教えてくれるので、マウスの皮下注の仕方からラットの大腿動脈穿刺の仕方、車のタイヤの空気の入れ方からウィンカーの電球の換え方まで教えてくれます(お気に入りの YouTuber は木下ゆうかです)。

留学は 2 年間と決めていたので時間もお金も残りわずかとなってしまい、NY にいられるうちにできることはしておこうと、妻は駐在員の奥様方と US Open Tennis を観に行ったり Tiffany 本店にランチを食べに行ったり、Kate Spade の服や時計を買ったりしています。私もスマホで YouTube(木下ゆうか)を観たり、5 袋で 3.99 ドルのサッポロ一番塩ラーメンを食べたり、献血をして無料で T シャツを貰ったりしています。最近は妻から JAL のビジネスクラスの帰国便のチケットを早く予約しろと急かされていますが、残りの期間でより多くの成果とお土産をもって日本へ帰れるように粉骨砕身しておりますので、医局員の皆様は私のことが嫌いでも、私の妻ことは嫌いにならないでください。

留学して　「国立精神・神経センター病院」

土岐　平（32 回生）



2018 年 4 月より国立精神・神経医療センター病院(NCNP)に国内留学させていただいている土岐平です。昨年、留学報告をさせていただいてから早いもので 1 年経過しました。12 月には娘も生まれ、4 月には新しいレジデント 7 人も入り、優秀な後輩に刺激をうけながら、今日も原因不明の症例に対し、研鑽を積ませていただいております。今年は、昨年と比べると入院患者が 80%程度と少なくなり、同期と昨年度が尋常ではなかったと話をしているところです。個人の能力を超えるタイトな体制であると、冗長性がなくなるのを感じていました。しかし、小児神経という独特な文化にどっぷりとつかまり、時に流されるだけ流れ、泳ぐのもまた、一興と思っています（他人からは溺れて見えたりしますね）。

昨年から NCNP で何をしているのか、何が変わったのか、何をもって帰ってくるのかと思われていると思うのですが、前回と同じく、朝から晩まで小児神経の患者の診断・病態・管理を調べています。小児神経患者を診たときの対応が変わり、日本語の教科書に記載している疾患はよく診る疾患になってきましたが、まだまだ、原因不明な患者も多く、個人的には少し知っている疾患が増えた程度であまり変わっておりません。昨年提出した検査の結果が徐々にではじめ、診断がつくものもあれば、つかないものもありました。自分の知識のなさに嫌気がさす日々ですが、業務の合間にあきらめずに文献・書籍を読み漁っています。しかし、この手順が大事だと思っています。今の時点での医学でわかっていないこと（発表・論文になる種）はこの手順を踏まないと気が付くことができないと思います。これを 10-30 年の年月、続けている上司がいます。わからないことはわからないと言い、知りたいと思う貪欲なまでの気持ちと、頻回にコミュニケーションをとり、自分の独りよがりにならないように今よりもっとよいものを作って発信していこうという上司の背中を見ながら、前に進んでいます。その中で北里に持って帰れるものは、小児神経専門医に送るスクリーニングの仕方（小児神経科ではない小児科の先生方へ）、原因不明な疾患を IRUD までもっていく手順（小児神経科を目指す先生方への指導）と思い、研鑽を積んでいます。

一部ですが具体例を挙げると、たとえば、①たまたま、受持ちをしていたミトコンドリア脳筋症・乳酸アシドーシス・脳卒中様症状症候群（MELAS）の患者が高血糖緊急症を発症し、心不全・横紋筋融解症（CK 値 30 万程度）を合併しましたが、生存し、現在、低血糖を認めるためインスリンも中断しています（NCNP に過去に同様な症例がいたようで現在、論文にするため、執筆中）。②ジストニアは正確な診断が難しいですが、神経変性疾患・代謝性疾患・脳性麻痺などに認める二次性ジストニアも言われて、知られていないだけで実際は多くいるといわれています。全国調査をする前に NCNP の患者で統計学的な症例報告をする予定です（現在、抄録作成中）。ともに小児神経科医の領域だけでは足りず、北里で経験し得た知識が役に立っています。今、北里で苦労して頑張っている後輩たちに送る言葉は、「期待以上のものが手に入る、でも覚悟しておくといい」にしたいと思います。

最後になりますが、北里大学の現状の中、私を送りだしていただいた岩崎先生・野々田先生をはじめ神経班のみなさま、同窓会のみなさま、医局員のみなさま、土日しか帰らない夫を支え家庭を守ってくれる妻に深く感謝しております。こちらで習得したことを体現できるように研鑽していきます。

学会報告

第 122 回日本小児科学会学術集会に参加して

岩﨑　俊之（17 回生）

2019 年 4 月 19 日より 21 日まで石川県金沢市で開催されました第 122 回日本小児科学会に参加致しましたので、海外出張のため欠席された石倉主任教授に代わりご報告致します。北里大学小児科からは、以下の臨床研究・発表がありました。

【口演】

「当院 PICU における小児重症患者迎え搬送の実態」

峰尾　恵梨　先生

“Trends in morbidity and mortality in 22-24 weeks from 2003-2012: A cohort study

中西　秀彦　先生

【ポスター】

「当院における食物経口負荷試験陽性例の検討」

紺野　寿　先生（写真 1）

「不全型 Cantrell 症候群に急性前骨髄球性白血病（APL）を発症した学童の一例」

釼持　学　先生

「侵襲性肺炎球菌感染症から感染性心内膜炎を起こした大動脈縮窄症の幼児例」

髙梨　学　先生（写真 2）

「抗てんかん薬治療により発達における改善を示した軽症滑脳症の 4 歳女児例」

石田　倫也　先生（写真 3）

「乳幼児期に発症した難治性凍瘡様皮疹の 2 症例」

江波戸　孝輔　先生（写真 4）

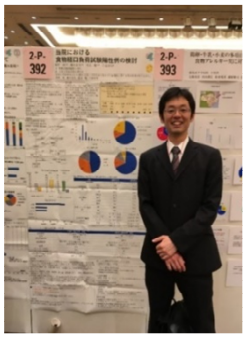


写真 1 紺野寿先生

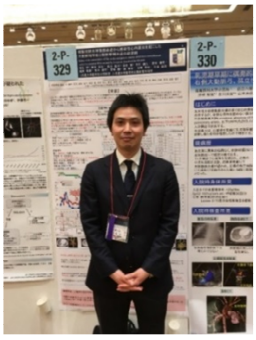


写真 2 髙梨学先生

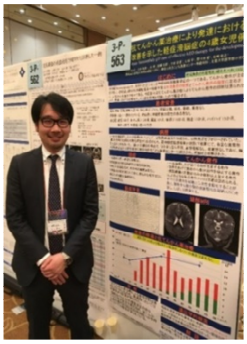


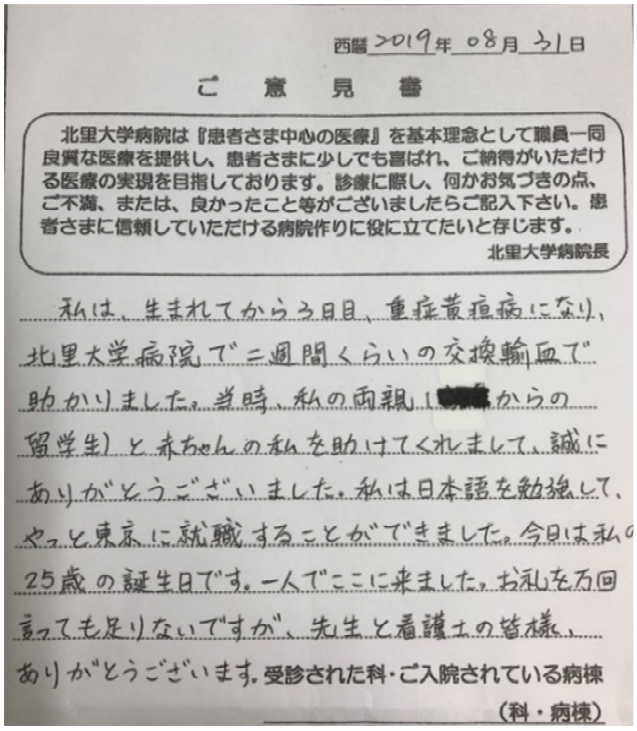
写真 3 石田倫也先生

写真 4 江波戸孝輔先生

演者の先生方は、みな堂々と発表して、フロアの先生方から示唆に富んだご意見やご質問を頂いておりました。北里大学小児科の伝統を受け継いで、各専門分野における丁寧な診療とそこから生まれる臨床上の疑問や治験を大切に研究に結びつけている姿勢は、今も変わりません。今年度より、新たに石倉健司先生を主任教授としてお迎えしたことで、更なる臨床研究の発展が期待されます。

同窓の諸先生方におかれましては、引き続きご指導ならびにご支援賜れれば幸いに存じます。

北里大学病院　ご意見書より　～嬉しいＮＥＷＳ～



西暦 2019年 08月 31日

ご　意　見　書

北里大学病院は『患者さま中心の医療』を基本理念として職員一同良質な医療を提供し、患者さまに少しでも喜ばれ、ご納得がいただける医療の実現を目指しております。診療に際し、何かお気づきの点、ご不満、または、良かったこと等がございましたらご記入下さい。患者さまに信頼していただける病院作りに役に立てたいと存じます。

北里大学病院長

私は、生まれてから3日目、重症黄疸病になり、北里大学病院で二週間くらいの交換輸血で助かりました。当時、私の両親（[redacted]からの留学生）と赤ちゃんの私を助けてくれまして、誠にありがとうございました。私は日本語を勉強して、やっと東京に就職することができました。今日は私の25歳の誕生日です。一人でここに来ました。お礼を万回言っても足りないですが、先生と看護士の皆様、ありがとうございます。受診された科・ご入院されている病棟

（科・病棟）

石倉教授室に、大学病院あてのご意見書の中から、うれしいご意見が届きました。

25年前に大学病院に入院された当時、新生児でいらっしゃった患者様より、小児科の先生方、看護師の方々に感謝のお言葉をいただきました。

ご記憶のある先生方がいらっしゃることと存じます。先生方の患者様に対する真摯な姿勢の賜物です。ご立派に成長され、東京で就職されたとのこと、小児科の患者様ならではと思います。先生方がいつもおっしゃられている、「小児科医としての喜び…」とはまさにこういうことなのでしょう。本当にうれしいご意見書です。

（同窓会事務局・小児科学秘書澤木）

新入会員

医学部小児科学　准教授　平田陽一郎

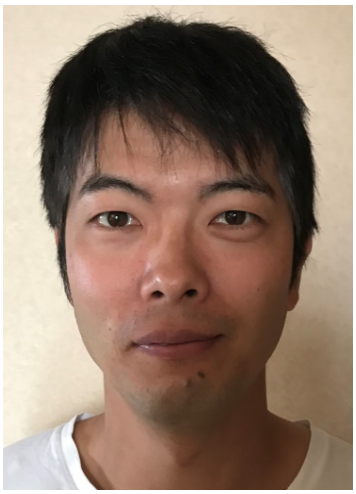
令和元年10月から北里大学病院小児科に勤務させていただくことなりました、平成12年卒業の平田陽一郎と申します。北里大学小児科同窓会に入会させていただき光栄に存じます。

私はこれまでおよそ20年間にわたって、小児科医師として研鑽を積んでまいりました。特に小児循環器の分野においては、先天性心疾患のみならず、川崎病・重症心不全・移植医療などの経験を重ねました。また最近では、成人先天性心疾患患者さんの移行期医療ということに興味をもち、移行期支援外来を立ち上げるなどの活動を行ってまいりま

した。

最近の若い研修医や学生の方々をみていると、自分が医師となったころとは、大きく意識が異なっていることを痛感いたします。「昔はよかった」という立場に甘えることなく、常に若者の視点に立って、次世代の小児科医師を育成していくことが、大学病院の教員に課せられた義務であると考えます。歴史と伝統のある北里大学小児科同窓会に加えていただいたことを胸に刻み、若い世代に自分の経験を伝えるべく、努力を重ねてまいる所存でございます。同窓会の諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

****



医学部小児科学　助教　奥田　雄介

2019 年度より北里大学小児科同窓会に加えていただきました。診療専門分野は小児科学、小児腎臓病学、透析医学、移植医療です。研究専門分野はこれらに関連する臨床研究、疫学研究です。大阪府出身で、2007 年に京都府立医科大学を卒業した後、京都市内の病院において初期研修、小児科後期研修を終え、東京都立小児総合医療センター腎臓内科で小児腎臓病の研修をいたしました。2014 年から滋賀医科大学小児科、2017 年よりカリフォルニア大学アーバイン校腎臓高血圧内科で学んだ後、2019 年 5 月より北里大学小児科でお世話になっております。新天地での仕事は慣れないことが多く、周りの方々にご迷惑を多々おかけしておりますが、毎日が刺激的で充実した日々を送っております。すでに同窓会の諸先生方とは折に触れてお話をさせていただいている中で、少しずつでも北里大学小児科発展と、地域の小児医療に貢献できるよう努力していかねばと身の引き締まる思いでおります。今年はラグビーワールドカップが日本で開催され、予想を上回る大盛況でしたが、これにちなんで One for All、 All for One（一人は皆のために、皆は一つの目的のために）の精神で診療、研究、教育に邁進する所存です。今はまだまだ手探りですが、活気ある一枚岩の北里大学小児科・同窓会に少しでも貢献するために、ベタかもしれませんがこのメンタリティーをもって仕事に取り組めば必ず見えてくるものがあると信じております。若輩者ではございますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

****

★冒頭でご挨拶いただいております石倉健司教授も新入会員としてお迎えしております。

同窓会総会・懇親会報告

★令和元年度　北里大学小児科同窓会総会・懇親会より★

写真１石倉教授

総会内容は、まず議事録全体をご覧ください。三沢理事の進行で、石倉教授の就任挨拶（写真１）、坂東先生の犬と共に行う医療とその効果などの興味深いお話をお聞きしました（写真２）、次に、恒例となった、小口会長の推薦による縣先生と武井先生の楽しいお話をお聞きしました。（写真３、４）内容は、記事となっていますので、ご覧ください。昨年は教授不在であったため、論文賞の審査が保留となっておりました。今年の総会で、2 年分の賞を選考・発表しました。2017 年の優秀論文同窓会賞は江波戸孝輔先生、2018 年度は、留学中の論文ということで、特別賞は本田崇先生、審査員特別賞（小口賞）は橋本芽久美先生に授与されました。同窓会賞の副賞は、同窓会基金から使途されます。同窓会基金の運用に関しては、北里小児科で、もっと使いやすくならないかというのが懸案でしたが、種々の検討がなされ、本年度より小児科教室の充実、発展および現役小児科医師の臨床、研究等にも役立てられることになり、期待してよろしいかと思います。基金が少なくなった際には、会員の皆様のご寄付をお願いする次第です。懇親会は、いつもより参加者も多く、北里の様子を、野々田先生はじめ、医局員の先生にしていただき楽しいときを過ごしました。その時の写真を数枚掲載しておきます。（写真５、６、７）２次会もゆったり、普段話せないようなことも飛び交いました。参加者の写真の一部、写真８を載せておきます、以上。

写真２ 坂東先生

写真３ 縣先生（左）

写真４武井先生（右）

懇親会・2次会の模様

写真 5

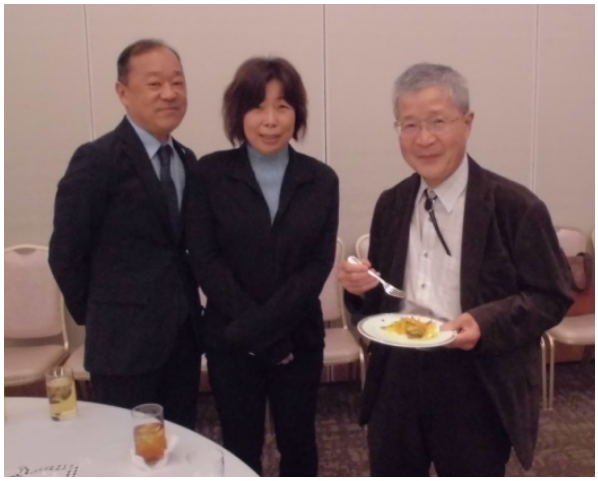


写真 6

写真 7

写真 8　二次会

****

2019 年度北里大学小児科同窓会総会議事録

●期　　日・場　　所：2019 年 6 月 22 日（土）16 時より

ホテルセンチュリー相模大野 8 階 フェニックス

●理事会・評議員会：16 時～　　出席者数：17 名、委任状 11 名（評議員会成立人数 14 名）

●総会：17 時半～　出席者数：47 名、委任状 101 名（総会成立人数 74 名）

●議題

【報告事項】　報告事項の各項目について承認された。

1．平成 30 年度事業報告：三沢総務担当理事より

①名簿発行（平成 30 年 6 月 1 日発行）紙媒体にて配布。事務局にて内製

②会報発行（平成 30 年 12 月 1 日発行 Vol. 23）

③平成 30 年 6 月 17 日同窓会理事会・評議員会・総会開催

④理事会　平成 31 年 1 月 31 日

⑤臨時理事会　令和元年５月 30 日

新入会員　石倉健司（平成 31 年３月入会）奥田雄介（令和元年５月入会）

２.平成 30 年度会計報告：砂押財務担当理事より

〇会費口　　年会費納入会員数 141　名

〇同窓会基金口　同窓会基金運用報告：砂押財務担当理事より

※会計監査により問題ないことを白井・山田監事が報告した。

平成30年度収支決算報告
（平成30年4月1日～平成31年3月31日）

収入の部		支出の部	
会費（30年度）	690,000	30年度総会費用	471,602
会費（過年度）	165,000	名簿発行費用	4,011
会費（31年度）	15,000	会報発行費用	34,000
利息	10	郵送・通信費	88,960
同窓会参加費	470,000	慶弔費	70,200
前年度繰越金	4,049,912	郵便振替手数料	9,912
		雑費	14,634
		人件費（29年度分実績）	394,984
		次年度繰越金	4,301,619
収入合計	5,389,922	支出合計	5,389,922

平成30年度　財務担当理事　砂押　渉
監　事　白井 宏幸
監　事　山田 俊彦

平成30年度同窓会基金収支決算報告
（平成30年4月1日～平成31年3月31日）

収入		支出	
前年度繰越金	5,540,637	小児科ホームページ 年間メンテナンス契約料	77,760
		周産期医学2019　年間購読料	47,606
		小児内科2019　年間購読料	48,837
収入合計①	5,540,637	支出合計②	174,203

次年度への繰越金　①－②＝5,366,434

平成30年度　財務担当理事　砂押　渉
監　事　白井 宏幸
監　事　山田 俊彦

【審議事項】

１.令和元年度事業計画

①令和元年年度会員名簿の発行について（6 月 1 日現在で発行予定）紙媒体にて配布。事務局にて内製中。

②会報 Vol.24 の発行について（12 月 1 日発行予定）

③令和元年度同窓会総会開催について　令和元年６月 22 日（土）開催

④令和２年度同窓会総会開催について　令和２年６月 13 日（土）開催予定→　6 月 20 日（土）に変更。

事業計画について承認された。

２.令和元年度予算案（令和元年４月～令和２年３月 31 日）

予算案について承認された。

令和元年度予算案
（令和元年4月1日～令和2年3月31日）

収入の部	予算額	支出の部	予算額
会費（過年度含む）	750,000	令和元年度総会費用	400,000
利息	10	名簿発行費用	5,000
同窓会参加費	400,000	会報発行費用	40,000
前年度繰越金	4,301,619	郵送・通信費	90,000
		慶弔費	60,000
		郵便振替手数料	10,000
		雑費	50,000
		人件費（30年度分実績）	400,000
		次年度繰越金	4,396,629
収入合計	5,451,629	支出合計	5,451,629

３.役員人事について

小口会長より、石倉教授を同窓会理事に推薦し、承認された。

来年は役員全員が満了となるので、年かけて理事評議員の選出方法について検討していく。

総会終了後のプログラム

〇石倉健司先生より　教授就任挨拶

〇坂東由紀先生より　北里大学メディカルセンター病院長就任挨拶

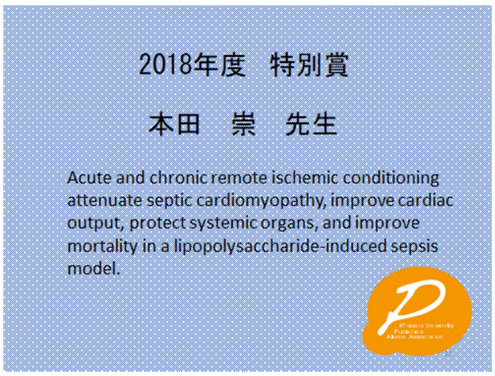
〇表彰式

2017 年度　優秀論文賞　江波戸 孝輔先生

The clinical utility and safety of a new strategy for the treatment of refractory Kawasaki disease.

2017 年度　小口賞　　橋本 芽久美先生

Hemophagocytic lymphohistiocytosis with high serum levels of IL-18 and predominant lymphocyte activation in a neonate born to a mother with adult-onset Still's disease.



2018 年度　特別賞　　本田 崇先生

（留学中の実績の為）

Acute and chronic remote ischemic conditioning attenuate septic cardiomyopathy, improve cardiac output,protect systemic organs,and improve mortality in a lipopolysaccharide-induced sepsis model.

小口会長より、表彰・賞状と目録の授与

〇会員よりの近況報告

縣陽太郎先生、武井研二先生より近況報告があった。

『石倉健司教授就任記念会祝賀会』開催

2019 年 10 月 5 日（土）ロイヤルパークホテル（日本橋）にて

約 230 名の方々にご出席いただき、盛大でしたが、また和やかで大変素敵な会になりました。ご出席いただきました先生方、お祝いをいただきました先生方、誠にありがとうございました。誌面の都合上、全てを掲載できず残念ではございますが、ほんの一部だけご紹介いたします。

（就任記念祝賀会事務局）

浅利　靖　医学部長

慶應義塾大学医学部小児科学教室

教授　高橋　孝雄先生

東京大学医学部附属病院　小児科

教授　岡　明　先生

岩村　正嗣　大学病院長

司会：新生児集中治療学

教授　中西　秀彦先生

津軽三味線の余興「三味道」

石倉　健司　教授

左から関谷里佳先生・石倉教授ご夫妻・高梨学先生

北里大学病院小児科外来担当表　　令和元年12月1日～　　外来主任:野々田豊

★　紹介用診療担当医一覧表記載医師　◎　曜日別外来責任者　＃　救急対応医・薬剤疑義照会

※　非常勤医師　　・（　）内の数字は第（　）週の数字

														回　診
月	小児総合診療外来 午　前		★◎ 石倉（第3週不在）	★◎ 野々田	★＃ 本田									
	専門外来	午前	［循環器］ 平田・高梨		［新・未］ 横関※			［遺伝］ 高田	［心理検査］ 津崎・松川					
		午後	［循環器］ 先崎・安藤・木村※	［新生児・未熟児］ 中西・釼持・横関※・大岡・石田				［遺伝］ 高田						
火	小児総合診療外来 午　前		★◎ 中西	★＃ 橘田										腎（9:30～）遺伝（10:00～）
	専門外来	午前	［神経］ 岩崎	［消化器］ 藤武※	アレルギー 坂東(2・4)※	1ヶ月健診 大岡	［循環器］ 先崎							
		午後	［腎臓］ 昆・河西※(2)・中村※・守屋※・越野※（不定）・岩波※					［アレルギー］ 坂東※（2・4）		［新・未］ 山口	［消化器］ 藤武※	［心理検査］ 津崎・松川		循環器（16:00～）
水	小児総合診療外来 午　前		★◎ 釼持	★# 高梨										感染症（1・3）（10:30NICU～）呼吸器（11:00～）
	専門外来	午前	［循環器］ 安藤	［神経］ 岩崎・野々田・白井宏直・白井宏幸※・細田※（2・4）武井※										
		午後	［呼吸器］ 原※・上田※・長田※（月1）			［神経］ 岩崎・砂押※・武井※・野々田・白井宏直			［発達］ 細田※（2・4）		［FolowUp］ チーフレジデント			神経（16:00～）
木	小児総合診療外来 午　前		★◎ 平田	★# 大岡										免疫（11:30～）
	専門外来	午前	［神経］ 岩崎・白井宏直	［新・未］ 釼持	［川崎病・免疫］ 扇原※・江波戸			［内分泌］ 橘田	［循環器］ 本田					
		午後	［循環器］ 髙梨	［消化器］ 藤武(3)※・小島（3）※		［リウマチ・膠原病・免疫不全］ 緒方※(2.4)・扇原（1.3)※・江波戸		［委託予防接種）］ 江波戸	［神経］ 岩崎・白井宏直	［呼吸器］ 梅原※（2・4）	［血液・腫瘍］ 今井※	［内分泌］ 橘田	［新・未］ 野渡※（2）	消化器（12:00～）
金	小児総合診療外来 午　前		★＃ 奥田	★ 白井										
	専門外来	午前	［内分泌］ 橘田	［神経］ 野々田		［1ヶ月健診］ 釼持	［新・未］ 山口							
		午後	［内分泌］ 橘田・橋本・大津※・田久保※			［循環器］ 本田	［腎臓］ 石倉（1・3・5週）　奥田			［栄養相談］ 陶山				
土	輪番制		［一般外来］ 輪番制											

病棟配置
令和元年12月1日～

	6E	PICU	総合周産期母子医療センター	救命救急センター	東病院 小児在宅支援センター
総病棟主任	本田		釼 持	昆	センター長 岩崎
病棟主任	本田	安 藤	釼 持		
病棟副主任		峰尾	大岡・石田・山口		野々田
スタッフ					原口
スタッフ					
病棟医	金子	西田	橋本		
	土岐	川田	芹澤		
教育主任	髙梨				
教育副主任	白井				

連携病院　令和元年12月1日～

海老名総合病院	箕浦・木村・佐藤・田村
地域医療機能推進機構 相模野病院	今井・藤武・横関
相模原協同病院	中村・伊藤・稲垣・藤本(産休)・紺野
北里大学メディカルセンター	坂東・森・関谷
相模台病院	白井・石田
相模原療育園	細田

★令和２年度小児科同窓会総会のお知らせ★

日　時：令和２年６月２０日（土）

理事・評議員会 16：00～17：30・総　会 17：30～

懇親会　総会終了後

場　所：小田急ホテルセンチュリー相模大野

編集後記

今号も盛りだくさんの内容となりました。
まず、石倉教授の力強い就任挨拶には、同窓会会員諸氏も心強く思われたことと拝察します。
坂東先生には、持前の明るさとバイタリティーをもって活躍されることを期待しています。
皆様、出きる処で応援しましょう。

北里で 研修された DR.Ortiz から、うれしいお手紙をいただきました。北里の創設期の様子が 垣間見られます。そのまま掲載しましたのでご一読ください。

酒井先生、西迫先生への追悼文を掲載しています。お世話になった先生もたくさんいらっしゃることと思いますが、紙面の都合から、幾人かの先生に皆様を代表して書いて頂いたことをご理解ください。（合掌）

今年は、台風被害が例年より多く見られました。どうぞ皆様、ご自愛の上、益々のご活躍を願っています。（平石）

北里大学小児科同窓会事務局
〒252-0375　神奈川県相模原市南区北里 1-15-1
（北里大学病院小児科外来ＣＲ内）
ＴＥＬ：042-778-8920（直通）
ＦＡＸ：042-778-9726
e-mail：kpdoso@med.kitasato-u.ac.jp